教育学部大学生の性意識と性行動

― 健康教育として性教育を考える ―

高 橋 珠 実・北 浦 佑 基・新 井 淑 弘

群馬大学教育実践研究　別刷
第28号　121～139頁　2011

群馬大学教育学部　附属学校教育臨床総合センター

群馬大学教育実践研究　第28号　121～139頁　2011

教育学部大学生の性意識と性行動
――健康教育として性教育を考える――

高　橋　珠　実[1)]・北　浦　佑　基[2)]・新　井　淑　弘[1)]

1）群馬大学教育学部
2）前橋市立粕川小学校

Sexuality Consciousness and Sexual Behavior among University Students at the Department of Education
――A Study of Sex Education as Health Education――

Tamami TAKAHASHI[1)], Yuki KITAURA[2)], Yoshihiro ARAI[1)]

1）Faculty of Education, Gunma University
2）Kasukawa Elementary School, Maebashi, Gunma

キーワード：教育学部生、性意識と性行動、健康教育
Keywords：university students at the department of education, sexuality consciousness and sexual behavior, health education

（2010年10月29日受理）

Ⅰ．はじめに

日本における性教育の在り方は様々な意見、考え方が存在している。性教育を行うことは重要という意見の一致はあるものの、その内容や進め方については多くの課題を抱えている。日本の教育機関における現在の性教育の考え方について、文部科学省の資料を参考にする。文部科学省の性教育への取り組みについて、文部科学省ホームページ[1)]によると、性教育を進めていく上での基本的な考え方は、

○指導要領に則り、児童生徒の発達段階に沿った時期と内容で実施すること
○保護者や地域の理解を得ながら進めること
○個々の教員がそれぞれの判断で進めるのではなく、学校全体で共通理解を図って実施すること

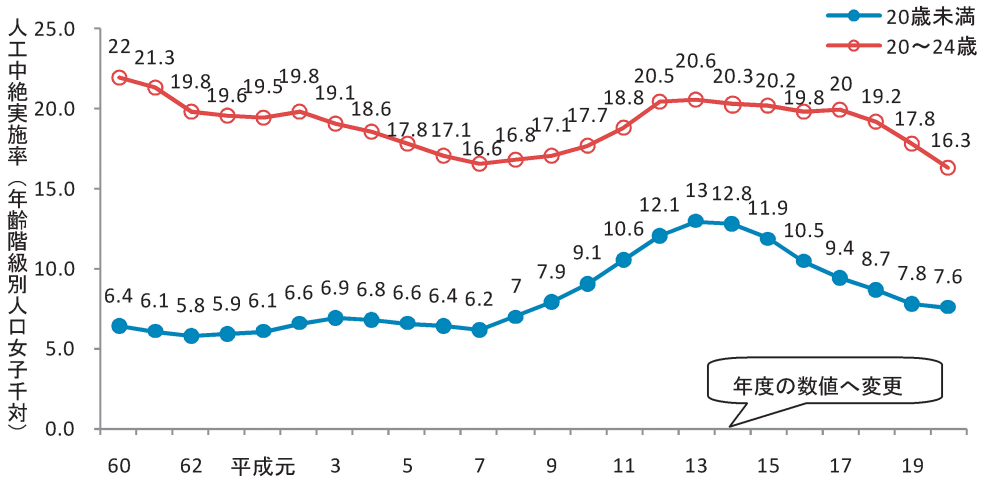
と示されている。

また、平成17年（2005年）7月に行われた健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会[2)]では、保健以外の教科においても一層の対応が求められる問題として、性教育について審議された。性教育として求められる内容について、学校における性教育では、子どもたちは社会的責任を十分にはとれない存在であること、また性感染症等を防ぐという観点から、子どもたちの性行為については適切ではないという基本的スタンスに立って、指導内容を検討していくべきであるという意見がまとめられた。また、性教育を行う際、具体的な避妊方法の指導等に走るのではなく、人間関係についての理解やコミュニケーション能力を前提とし、その理解の上に性教育が行われるべきであるという意見で一致している。

性教育の一層の必要性が求められている理由の１つとして、若年層の人工中絶の問題が挙げられる。厚生労働省が発表した平成13年（2001年）母体保護統計報告の「年次、妊婦週別人工中絶実施率（15歳以上50歳

未満人口千対)」[3]、平成18年度（2006年度）および平成20年度（2008年度）保健・衛生行政業務報告[4)5)]をもとに昭和60年（1985年）から平成20年度（2008年度）25年間の「20歳未満」および「20～24歳」の人工妊娠中絶実施率を図１に示した。「20歳未満」の人工中絶実施率は昭和60年（1985年）から平成7年（1995年）までは低下傾向であったが、平成7年度（1995年）以降、平成13年度（2001年）まで徐々に上昇した。平成13年度（2001年）以降は再び低下傾向にある。20～24歳の人工中絶実施率についても、平成13年度（2001年）をピークに低下傾向にある。

また、平成15年度（2003年度）から新たに「20歳未満」を詳細に把握した結果を公表している[4)5)]。平成15年度（2003年度）から平成20年度（2008年度）の６年間の人工妊娠中絶実施率（女子人口千対）について、「20歳未満」の各歳と「20～24歳」を図２にまとめた。平成15年から平成20年の６年間では、いずれも低下傾向にあるが、依然として中絶実施率は高率である。また、15歳未満の人工妊娠中絶実施件数は平成15年度（2003年）483件、平成16年度（2004年）456件、平成17年度（2005年）308件、平成18年度（2006年）340件、平成19年度（2007年）345件、平成20年度（2008年）



注）中絶実施率は「母体保護統計報告」により報告を求めていた平成 13 年（2001 年）までは暦年の数値であり、「衛生行政報告例」に統合された平成 14 年（2002 年）からは年度の数値である。

図１　人工妊娠中絶実施率（25年間の年次推移[注)]）

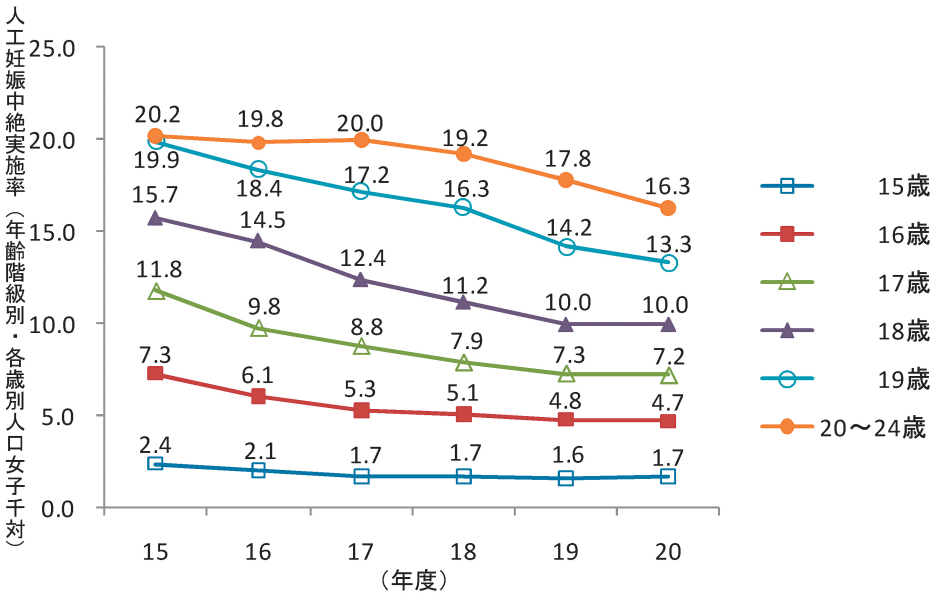


図２　「20歳未満」の各歳および「20～24歳」の人工妊娠中絶実施率（６年間の年次推移）

347件となっている。

このような統計の数値からは読み取れない、人工妊娠中絶を経験した者が抱える問題にはどんなものがあるのだろうか。この点はこれからの性教育を考える上で重要だと考えられる。

黒島ら[6]は中絶手術が患者の心理面・身体面に与える影響についてまとめている。産婦人科外来を受診した患者にアンケート調査を行い、中絶経験があると回答した95ケースを対象にした。中絶後の心理的影響について、「水子供養をしようと考えたことがあるか」という質問に対して、「水子供養をした」(45%)、「真剣に考えた」(16%)、「少し考えた」(31%)となった。この結果について黒島ら[6]は、中絶経験者が精神的に追い込まれる可能性、または「水子供養」で精神的負担を軽減している可能性も考えられると述べている。また、中絶者の7割以上が「中絶は仕方なかった」と回答し、中絶を肯定的に捉えている一方、中絶者の3割が、時間がたった今でも自分を責め、喪失感、孤独感、自己嫌悪感といったネガティブな感情も同様に抱えていることが明らかになった。ネガティブな感情がみられない患者、そして中絶経験による深い心の傷を長い間持ち続けている患者の両方が存在する実態が明らかにされた。

「第4回男女の生活と意識に関する調査」[7]では、16～49歳の中絶経験者に最初の中絶手術を決めた時の気持ちを尋ねている。45%の女性が「胎児に対して申し訳ない気持ち」、16.4%が「自分を責める気持ち」と回答した。この結果を受けて北村[8]は中絶により、心にトラウマをつくりかねない事態となっていることから、予期しない妊娠、その結果としての中絶を避けることが重要な課題であると述べている。予期しない妊娠を避けるために、性教育はどうあるべきなのか。

大学生を対象とした性の実態調査では、大学入学後に環境や考え方の変化に伴って性交経験率が増加する[9]という報告がある。全国110の大学の大学生を対象とした調査では、性交経験が「ある」と答えた者は58.2%おり、その中で「いつも避妊する」と答えた者は男女とも60%以上いたが、その方法として「膣外射精法」と答えた者が約4割おり、一通り性教育を受け終えた大学生を対象とした調査において、正しい避妊行動がとられていない現状が明らかになった[10]。

大学生を対象とした性意識や性行動についての研究は多くあるが、教育系の大学に特化した調査の数は多くないことから、本研究では教育学部の大学生を対象に性に関する意識・行動等のアンケート調査を行い、将来、性教育を教える立場にある大学生の性の意識や性行動の実態を明らかにすることを本研究の一つの目的とした。さらに、その実態や先行研究の結果を合わせて、今後の性教育の在り方を検討していく。

Ⅱ．方法

1）調査期間および対象

2006年10月3、5、6日にA大学教育学部生229名を対象にアンケート調査を行った。アンケート調査用紙は先行研究[9][11][12]を参考にし、独自に作成した。

2）調査方法

調査は無記名自己記述式の質問紙調査方法により行い、プライバシー保護のため、記入の際に他の人から見られないように座席を工夫し、記入後は内容が見られないように調査用紙を折ったのち、回収箱に入れて回収した。

対象者に対する倫理的配慮として、調査の前に回答は無記名としプライバシーは保護されること、アンケートへの参加は強制ではなく、答えたくない質問は答える必要がないことを説明した。

3）統計処理

男女比較、性交経験別の比較を行う際はクロス集計を用い、独立性の検定を行った。なお、統計処理には統計解析ソフトSPSS Statistics 17.0（SPSS社製）を用い、有意水準はいずれの場合も危険率5%未満とした。

Ⅲ．結果および考察

今回、調査対象となった学生は平成元年改訂の指導要領[13]に従い、保健を小学校第5学年から学んでいる。その内容は、小学校で、（1）体の発育と心の発達について、（2）けがの防止について、（3）病気の予防について、（4）健康な生活についてである。性教育に関する内容は、「体の発達と心の発達」の中で、「体は、年齢に伴って変化すること。また、思春期になる

と、体つきが変わり、初経、精通などが起こって次第に大人の体に近づくこと。」「思春期になると異性への関心が芽生えること。」を理解できるようにすると記されている[14]。中学校では平成元年改訂[15]、または平成10年改定の指導要領[16]となり、内容は（１）心身の機能の発達と心の健康について、（２）健康と環境について、（３）傷害の防止について理解を深める、（４）疾病の予防について理解を深める、（５）健康と生活について、であった。性教育に関する内容は、「心身の機能の発達と心の健康」の中で、「思春期には内分泌の働きによって生殖に代わる機能が成熟すること。また、こうした変化に対応した適切な行動が必要となることを理解できるようにする。」と書かれている[17]。また、その内容の取扱いについては、「妊娠や出産が可能となるような成熟が始まるという観点から、受精・妊娠までを取り扱うものとし、妊娠の経過は取り扱わないものとする。また、生殖に関わる機能の成熟に伴い、性行動が生じたり、異性への関心が高まることから、異性の尊重、情報への適切な対処や行動の選択が必要となることについて取り扱うものとする。」と記されている。高等学校での内容は、（１）現代社会と健康、（２）生涯を通じる健康、（３）社会生活と健康であった[18]。高等学校で学ぶ性教育に関する内容について、「生涯を通じる健康」の中で「性的熟成に伴う心理面、行動面の変化に対応して、自分の行動の責任感や異性を尊重する態度が必要であること、及び性に関する情報等への適切な対処が必要であることを理解できるようにする。」、また「健康な結婚生活について、心身の発達や健康状態など保健の立場から理解できるようにする。その際、受精、妊娠、出産とそれに伴う健康課題について理解できるようにするとともに、家族計画の意義や人工妊娠中絶の心身への影響などについても理解できるようにする。」と示されている[19]。このような教育を受けてきた学生の性に関する意識・行動等の調査結果について明らかにし、考察を行った。

アンケートの回収率は100％であった。全ての質問に対して無回答１名、性別のみ回答１名、無効回答1名を除き、有効回答者数は226名、有効回答率は98.7％であった。

有効回答者の内訳は、男子学生108名（47.8％）、女子学生116名（51.3％）、性別不明２名（0.9％）であった。結果を男女別にまとめ、比較する際は、性別不明の２名を除いた。また、性交経験別に結果をまとめ、比較する際は、性交経験無回答の10名を除いた。

１）性行為の経験について

性行為の経験があるものは、全体で129名：57.1％（男子学生65名：50.4％、女子学生62名：48.1％、性別無回答２名：1.6％）、経験のないものは87名：38.5％（男子学生41名：47.1％、女子学生46名：52.9％）、無回答10名（男子学生２名：20％、女子学生８名：80％）であった。性行為の経験について、男女間に有意差はみられなかった（男子学生　経験あり65名：60.2％、経験なし41名：38.0％、無回答２名：1.9％）（女子学生　経験あり62名：53.4％、経験なし46名：39.7％、無回答8名：6.9％）。

第６回青少年の性行動全国調査[20]では、大学生男子および女子の性交経験率はともに61％であった。本調査の結果では男子が全国調査の結果とほぼ同じ割合だったのに対し、女子では低い割合であった。

２）性交の行為をしても良いと考える年代

性交の行為をしても良いと考える年代を聞き、結果を男女別にまとめた（図３）。無回答者数は、男子学生３名、女子学生４名であった。

一番多かった回答は男女ともに「高校生くらい」（男子学生54名：50.0％、女子学生43名：37.1％）であったが、男女比較を行った結果、男子学生の方が「高校生くらい」と答えた割合が有意に高かった（$p<0.05$）。「中学生くらい」という回答は男性７名（6.5％）、女子学生４名（3.4％）であった。「結婚後」という回答は最も少なく、計７名（3.1％）であった。

性交経験あり群と性交経験なし群に分け、性交をしても良いと考える年代を比較・検討した（図４）。経験あり群では「高校生くらい」と回答した割合が72名（55.8％）と一番高く、経験なし群（22名：25.3％）と比べ有意に高い割合だった（$p<0.01$）。経験なし群では、「高校生くらい」（22名：25.3％）、「高校卒業後」（20名：23.0％）、「わからない」（21名：24.1％）がほぼ同じ割合であった。また、経験なし群の「成人後」（12名：13.8％）（$p<0.05$）、「結婚後」（７名：8.0％）（$p<0.01$）、「わからない」（21名：24.1％）（$p<0.01$）

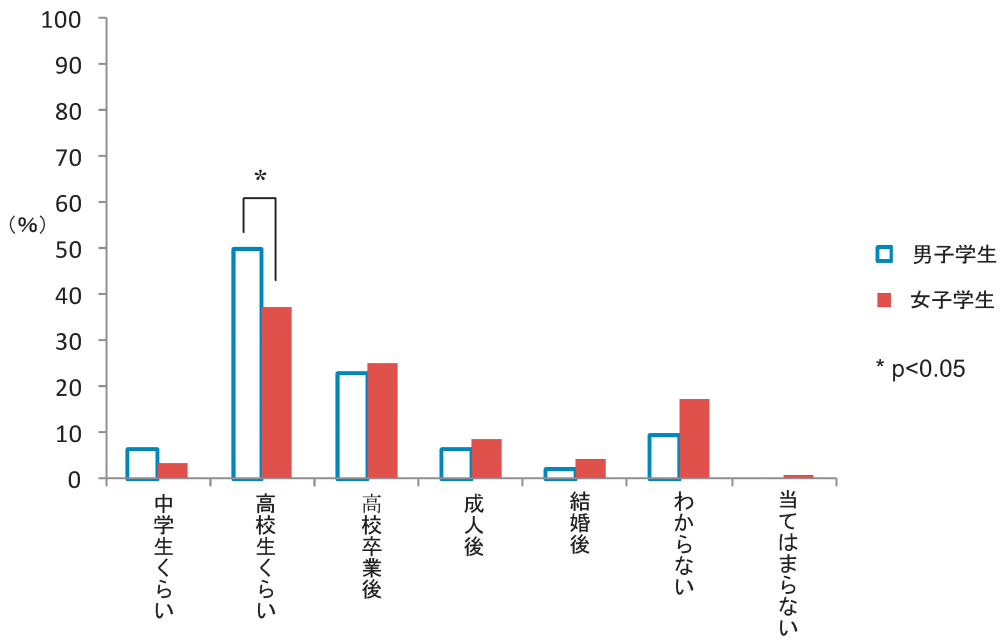


図３　性交の行為をしてもよいと考える年代（男女別）

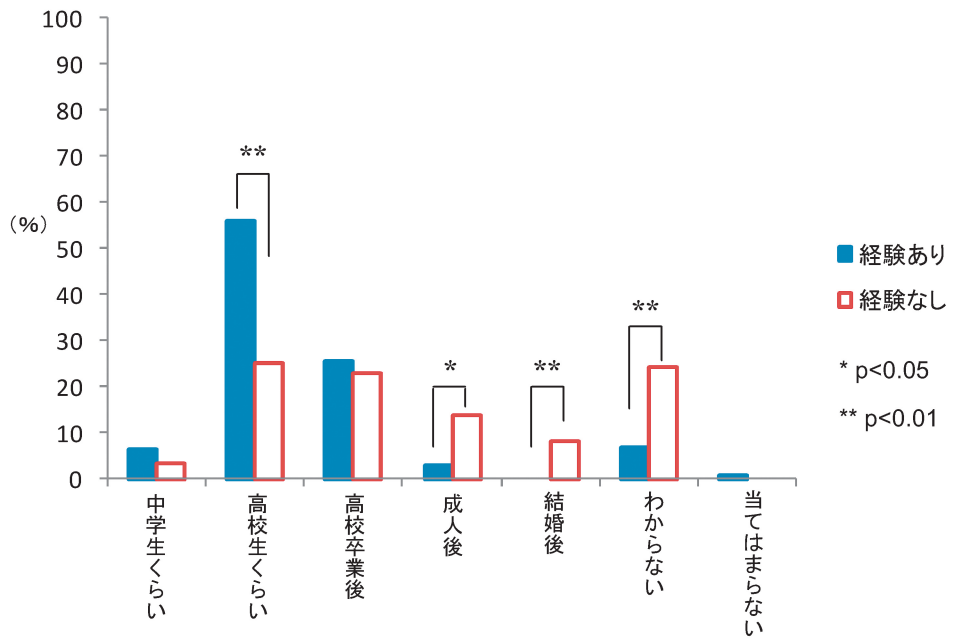


図４　性交の行為をしてもよいと考える年代（性交経験の有無別）

が経験あり群に比べ、有意に高い割合であった。

同じ年代の学生でも、性交をしてもよいと考える年代に対する回答は、性交経験の有無により違いがみられることが考えられた。

さらに、性交をしてもよいと考える年代を男女別および性交経験別に分け、比較・検討を行った（図５）。男女ともに、経験あり群の「高校生くらい」と回答した割合が有意に高くなった（男子学生：経験あり群60.0%、経験なし群36.6%、$p<0.05$、女子学生：経験あり群51.6%、経験なし群15.2%、$p<0.01$）。また、「わからない」という回答は男女ともに性交経験なし群で高い割合であった（男子学生：経験あり群3.1%、経験なし群19.5%、$p<0.01$，
女子学生：経験あり群11.3%、経験なし群28.3%、$p<0.05$）。女子学生では、性交経験あり群よりもなし群で「成人後」（経験あり群3.2%、経験なし群15.3%、$p<0.05$）、「結婚後」（経験あり群0.0%、経験なし群10.9%、$p<0.01$）と回答した割合が有意に高く、女子

学生にみられた特徴的な結果であった。

男女ともに性交経験あり群の半数以上が、性交をしてもよいと考える年齢を「高校生くらい」としている。教育学部生に対し、性交をしてもよいと考える年代とその理由についても明らかにすること、そして妊娠や感染症のリスクをどうとらえているのか、追及していくことが今後の課題と考える。

3）性交の行為の捉え方

性交の行為の捉え方について、複数回答可で選択させた結果を男女別に示した（図６）。この質問の無回答者数は男女３名ずつであった。

「愛情を確かめるもの」（男子学生82名：75.9％、女子学生84名：72.4％）、「子どもを作るもの」（男子学生62名：57.4％、女子学生76名：65.5％）という捉え方が男女ともに高い割合であった。男女間の比較では、「快楽を得るもの」（男子学生53名：49.1％、女子学生24名：20.7％）、「性欲を解消するもの」（男子学生41名：38.0％、女子学生19名：16.4％）に有意差が認められた（$p<0.01$）。

男子大学生の性交の捉え方について、斎藤ら[9]の大学生を対象とした研究では、男性が女性に比べて「快楽を得るもの」、「性欲を解消するもの」と回答した割合が有意に高く、男性は性交を性欲や快楽など身体的なものと捉えていると示唆している。このような斎藤ら[9]の研究結果と本研究結果は同様のものであった。本研究において、女子学生で「子どもを作るもの」や「コミュニケーション」と回答した割合が男子学生より高かったことから、男子学生と異なる性交の行為の捉え方が女子学生に存在することが考えられた。また、女子学生の性交の捉え方について、斎藤ら[9]は「愛情を確かめるもの」という割合が女子学生で有意に高く、女子学生は性交を愛情など情緒的なものと捉えていると示唆している。本研究では男子および女子学生の７割以上が性交は「愛情を確かめるもの」と答えており、男女に同様な捉え方が存在することも明らかになった。

性交経験の有無別に性交の捉え方を比較した（図７）。この質問の無回答者数は６名で、そのうちの１名が性交経験がある者、ない者は５名であった。このことから性交経験の有無がこの質問に対する回答率に影響を与えることが考えられた。

「愛情を確かめるもの」（経験あり群82.2％、経験なし群60.9％）、「性欲を解消するもの」（経験あり群32.6％、経験なし群18.4％）、および「コミュニケーション」（経験あり群38.0％、経験なし群21.8％）を選択した割合が経験あり群で有意に高かった（$p<0.01$）。また、「子どもを作るもの」（経験あり群50.4％、経験なし群75.9％）を選択した割合は、経験なし群で有意に高かった（$p<0.01$）。

斎藤ら[9]の大学生を対象とした研究では、性交経験のある群がない群に比べて「愛情を確かめるもの」、

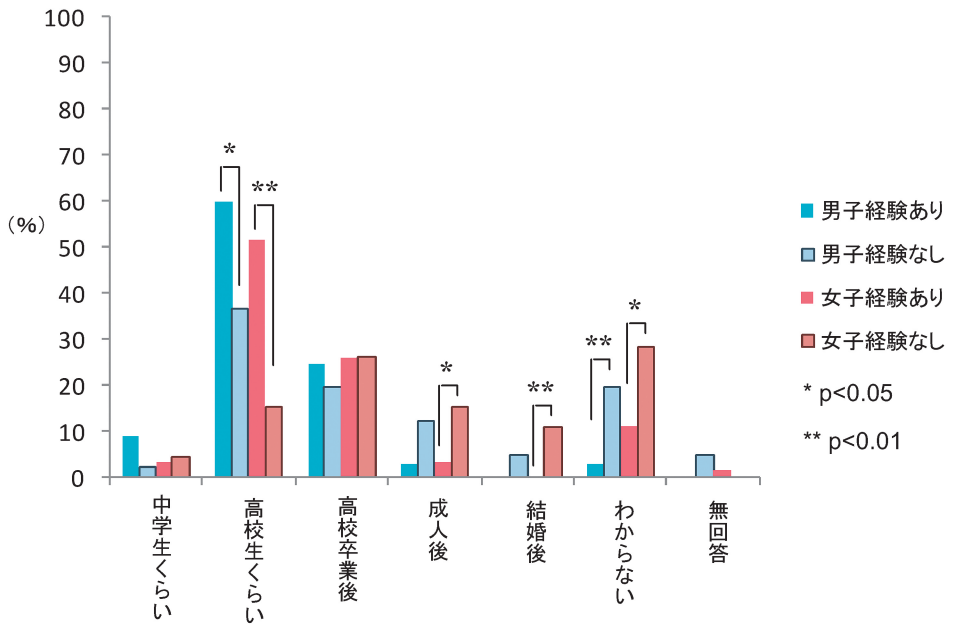


図５　性交の行為をしてもよいと考える年代（男女および性交経験の有無別）

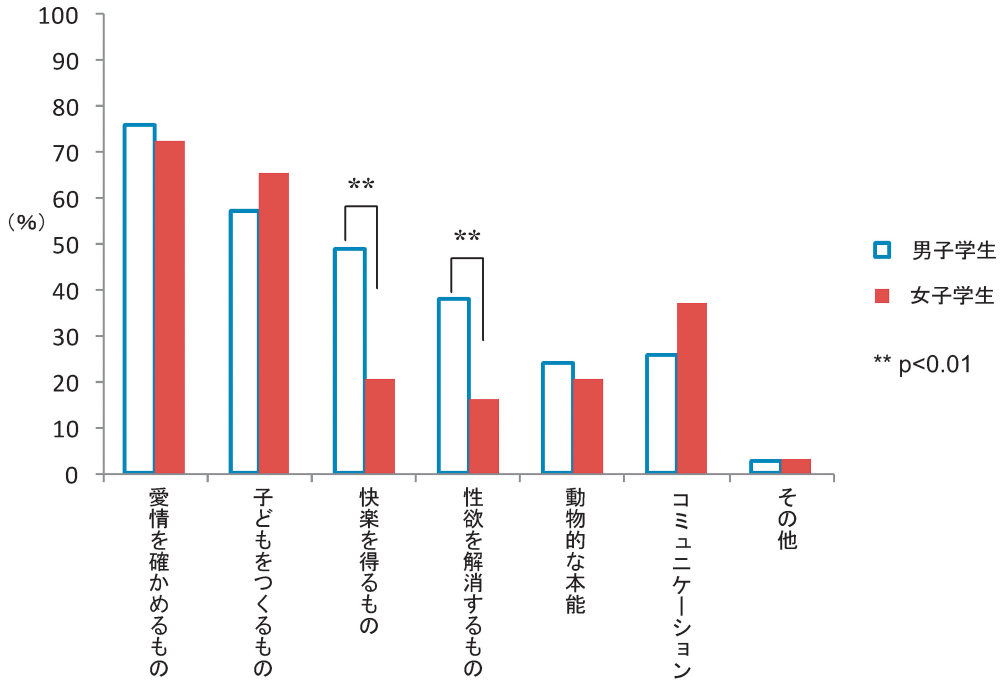


図６　性交の行為の捉え方（男女別）

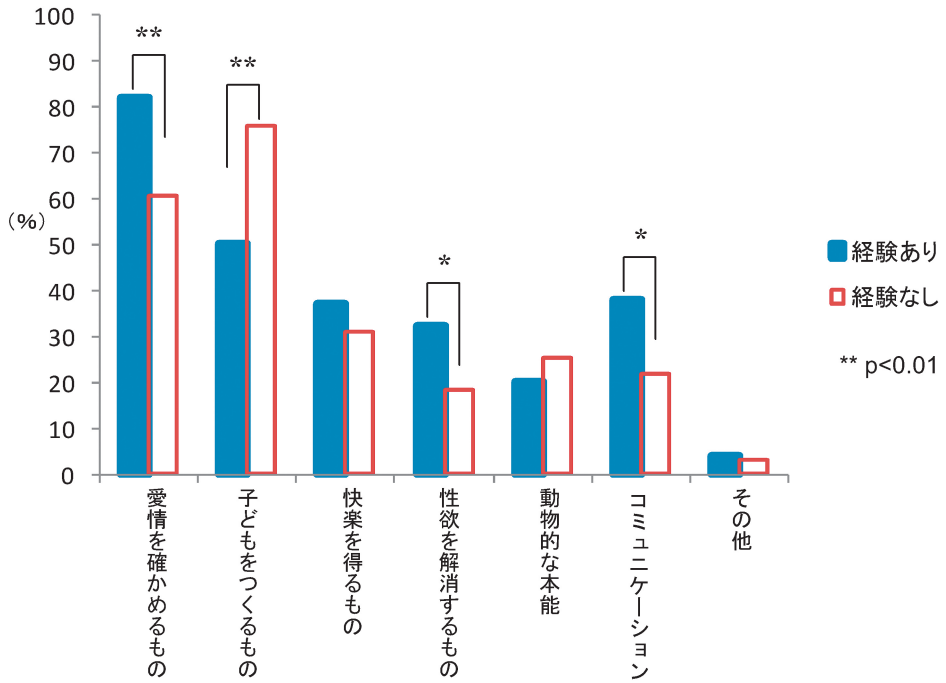


図７　性交の行為の捉え方（性交経験の有無別）

「快楽を得るもの」、「性欲を解消するもの」と回答した割合が有意に高かった。本研究では「愛情を確かめるもの」、「性欲を解消するもの」の結果で斎藤ら[9]と同様の結果を得た。斎藤ら[9]の研究では「コミュニケーション」という選択肢はなく、本研究との比較は行えなかった。「子どもをつくるもの」という回答は性交経験なし群で有意に高く、斎藤ら[9]の研究と同様の結果であった。

男女別および性交経験の有無別に性交の捉え方を比較した（図８）。男女ともに、「愛情を確かめるもの」（男子学生：経験あり群84.6％、経験なし群61.0％、女子学生：経験あり群80.6％、経験なし群60.9％）と「子どもをつくるもの」（男子学生：経験あり群47.7％、経験なし群75.6％、女子学生：経験あり群54.8％、経

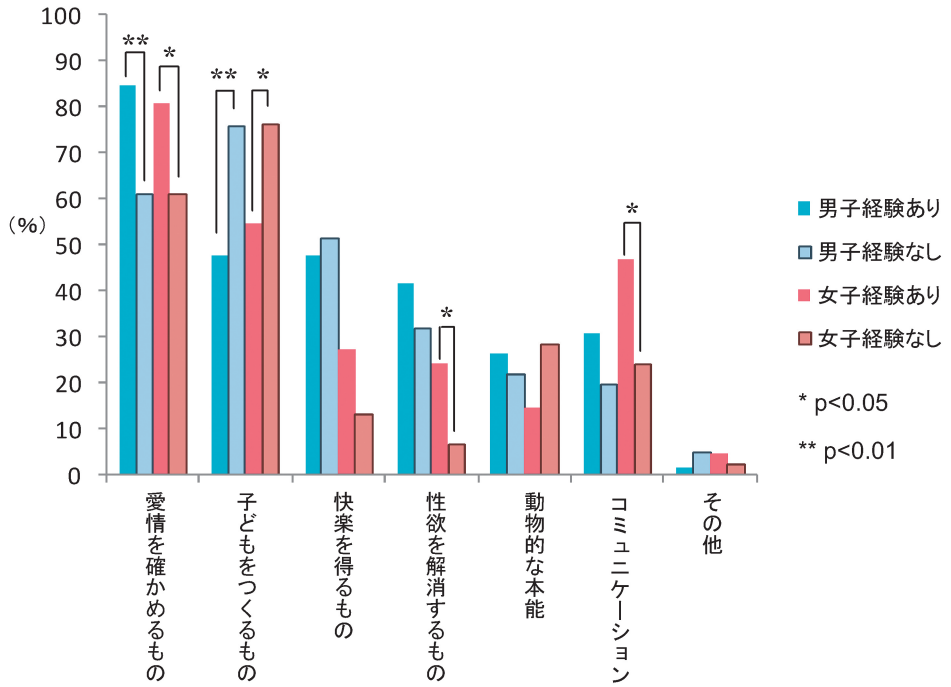


図８　性交の行為の捉え方（男女別および性交経験の有無別）

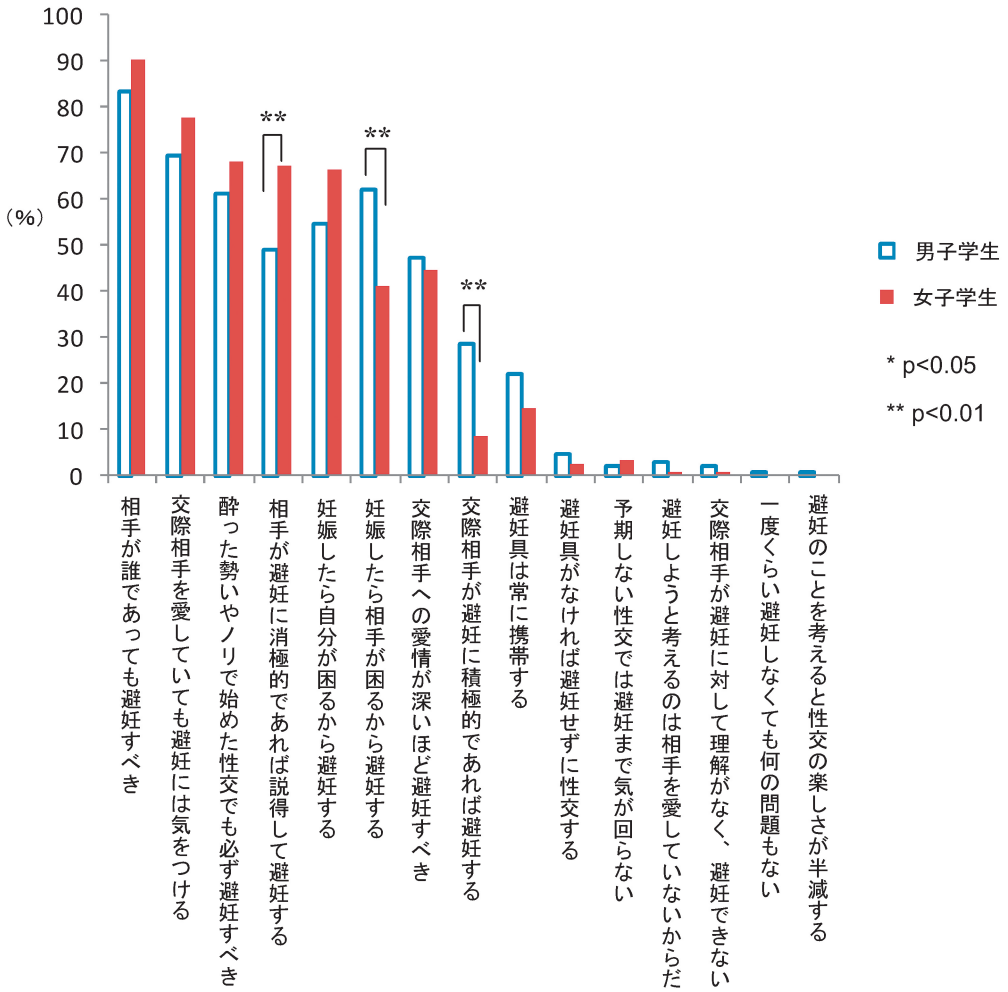


図９　避妊に関しての考え方（男女別）

験なし群76.1％）で、性交経験あり群となし群の間で差が見られた。「愛情を確かめるもの」は男女ともに性交経験あり群で有意に高く（男子学生p<0.01、女子学生p<0.05）、「子どもをつくるもの」はともに性交経験なし群で有意に高い割合であった（男子学生p<0.01、女子学生p<0.05）。また、女子学生では、「性欲を解消するもの」（経験あり群24.2％、経験なし群6.5％）、「コミュニケーション」（経験あり群46.8％、経験なし群23.9％）と回答した割合が、経験あり群で有意に高かった（p<0.05）。

性交の捉え方について、男女ともに性交経験あり群で「愛情を確かめるもの」の割合が有意に高く、経験なし群で「子どもを作るもの」の割合が有意に高かった。性交について、性交経験の有無により異なる捉え方が存在していた。また、女子学生では性交経験の有無により、より異なる考え方が存在することが明らかになった。

4）避妊に関しての考え方

避妊に関しての考え方を複数回答可で選択させた結果を男女別にまとめた（図９）。この質問の無回答者は男子学生４名、女子学生３名であった。

男女別の比較では「相手がだれであっても避妊はすべきである」（男子学生83.3％、女子学生90.5％）、「交際相手を愛していても、避妊には気をつける」（男子学生69.4％、女子学生77.6％）、「酔った勢いやノリで始めた性交でも必ず避妊する」（男子学生61.1％、女子学生68.1％）、「妊娠したら自分が困るから避妊する」（男子学生54.6％、女子学生66.4％）を選んだ割合は女子学生で高かった。また有意な差がみられたものでは、「相手が避妊に対して消極的であれば説得して避妊する」（男子学生49.1％、女子学生67.2％）が女子学生で有意に高かった（p<0.05）。「妊娠したら相手が困るから避妊する」（男子学生62.0％、女子学生41.4％）「交際相手が避妊に積極的であれば避妊する」（男子学

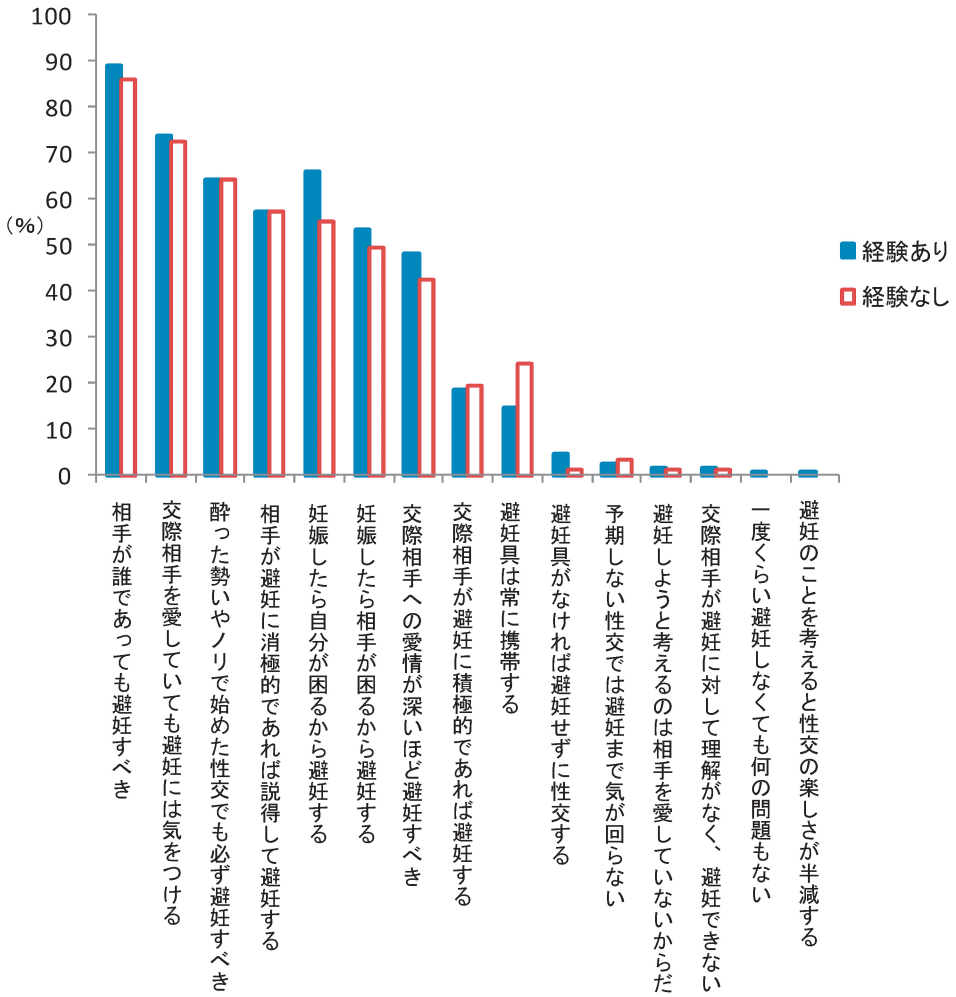


図10　避妊に関しての考え方（性交経験別）

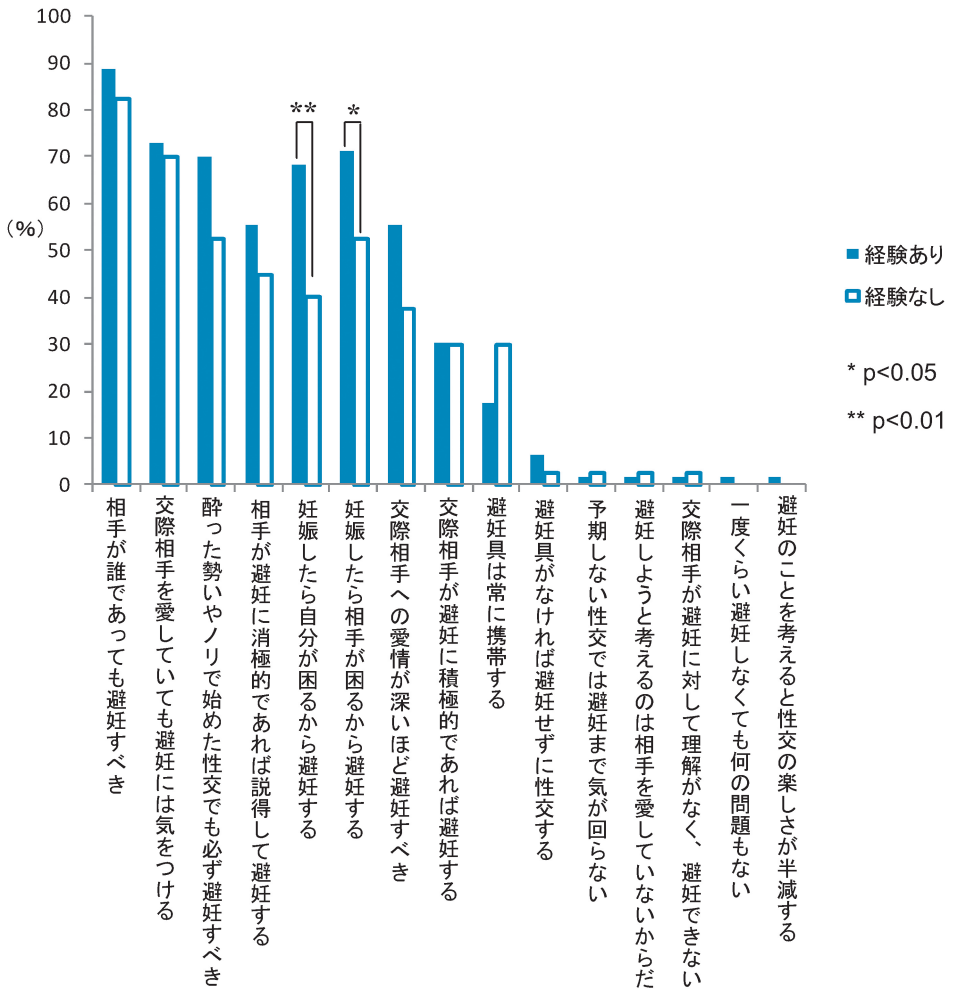


図11　避妊に関しての考え方（男子学生・性交経験別）

生28.7％、女子学生8.6％）は男子学生で有意に高かった（p<0.01）。

避妊に関しての考え方は女子学生でより積極的な考え方がみられた。このような結果について、予期しない妊娠というリスクについて考えると、女子学生はより自分自身に関わる問題と感じていることが示唆された。

避妊に関しての考え方を性交経験の有無別に群わけを行い、比較した（図10）。この質問の無回答者は性交経験あり群３名、経験なし群３名であった。性交経験の有無による、避妊に関しての考え方に有意差は認められなかった。

避妊に関しての考え方を男女別および性交経験別に分け、比較を行った（図11、12）。男子学生の結果では「妊娠したら自分が困るから避妊する」（経験あり群68.3％、経験なし群40.0％）（p<0.01）および「妊娠したら相手が困るから避妊する」（経験あり群71.4％、経験なし群52.5％）（p<0.05）と回答した割合が性交経験あり群で有意に高かった。女子学生の結果は性交経験なし群により積極的な避妊の考えがみられたものの、性交経験あり群との間に有意差は認められなかった。避妊に関しての考え方について、男子学生では性交経験あり群により避妊に対する積極的な考え方がみられた一方、女子学生では性交経験なし群により積極的な考えを持つ傾向がみられた。この点について、今後さらに追及していきたい。

５）現在、パートナーまたは自分が妊娠したらどうするか

現在、パートナーまたは自分が妊娠したらどうするかに対する回答を男女別にまとめ、比較を行った（図13）。無回答者は、男子学生５名、女子学生２名であった。

「産ませる／産む」と回答した割合が男子学生で有

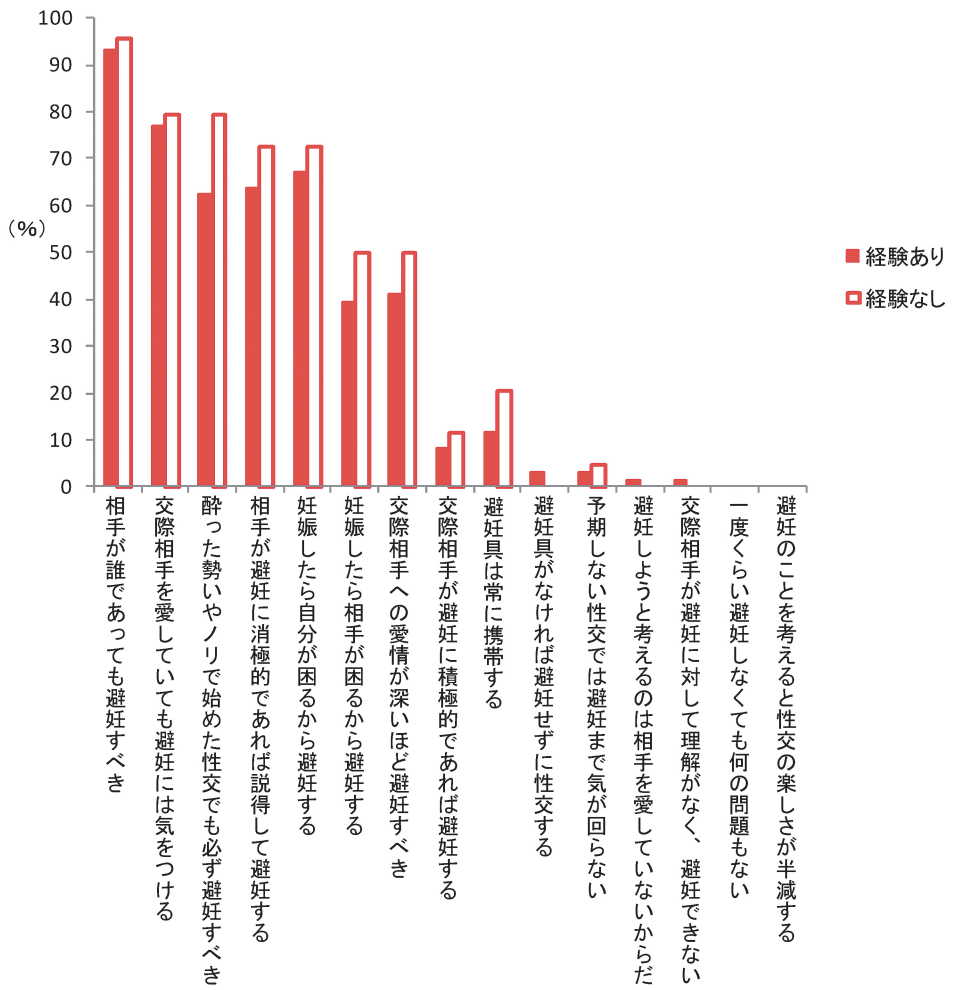


図12　避妊に関しての考え方（女子学生・性交経験別）

意に高く（男子学生32.4％、女子学生20.7％）（$p<0.05$）、「中絶させる／中絶する」と回答した割合は女子学生で有意に高かった（男子学生11.1％、女子学生25.9％）（$p<0.01$）。「わからない」という回答は、男女ともに半数あった（男子学生50.9％、女子学生51.7％）。

男子学生に「産ませる／産む」と回答した割合が高かったことについて、齋藤ら[9]の研究でも同様の結果を得ている。また、本研究では「中絶させる／中絶する」が女子学生で有意に高い割合であった。女子学生にとって、学生という立場で子どもを産むことは様々な理由から難しいと考えていることが示唆された。

「わからない」と回答した割合が、男女ともに半数を超えていることから、自分自身に起こりうる問題として考えたことがないことが示唆された。

「中絶させる／中絶する」と回答した男子学生12名、女子学生30名を対象に中絶する理由を聞いた。中絶する理由について、「結婚するつもりがない」以外の項目において、女子学生の割合が高かった（図14）。妊娠は女性の生活に大きく影響を与えるため、女子学生はさまざまな理由から、中絶を選択しなければならない状況が考えられた。

岸田[10]の中絶経験者を対象に行った研究では、学生中絶経験者の中絶理由は「仕事や学業が続けられない」、「経済的理由」が挙げられた。また、中絶手術前、手術後、術後１週間、術後２カ月の各時期に受けたい支援は何かと尋ねた結果、学生中絶経験者は、パートナーや医療従事者からの精神的援助や水子供養、医療従事者からの健康に関するアドバイス等多くの支援を望んでいることが明らかにされた。学生のうちの妊娠は産ませる／産むことを選択するにせよ、中絶させる／中絶することを選択するにせよ、さまざまな問題と向き合わなければならなくなることがわかる。

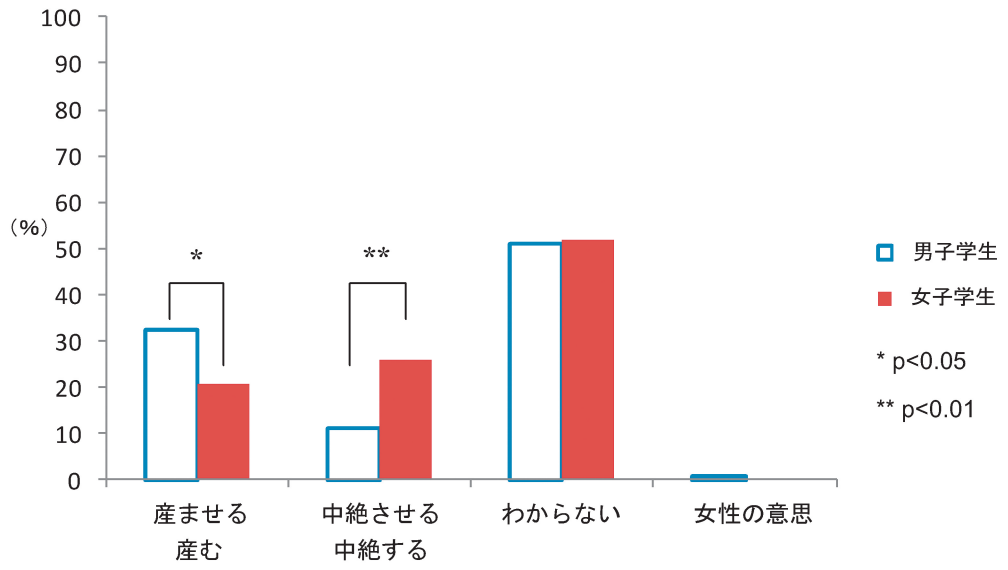


図13　パートナーまたは自分が妊娠したらどうするか（男女別）

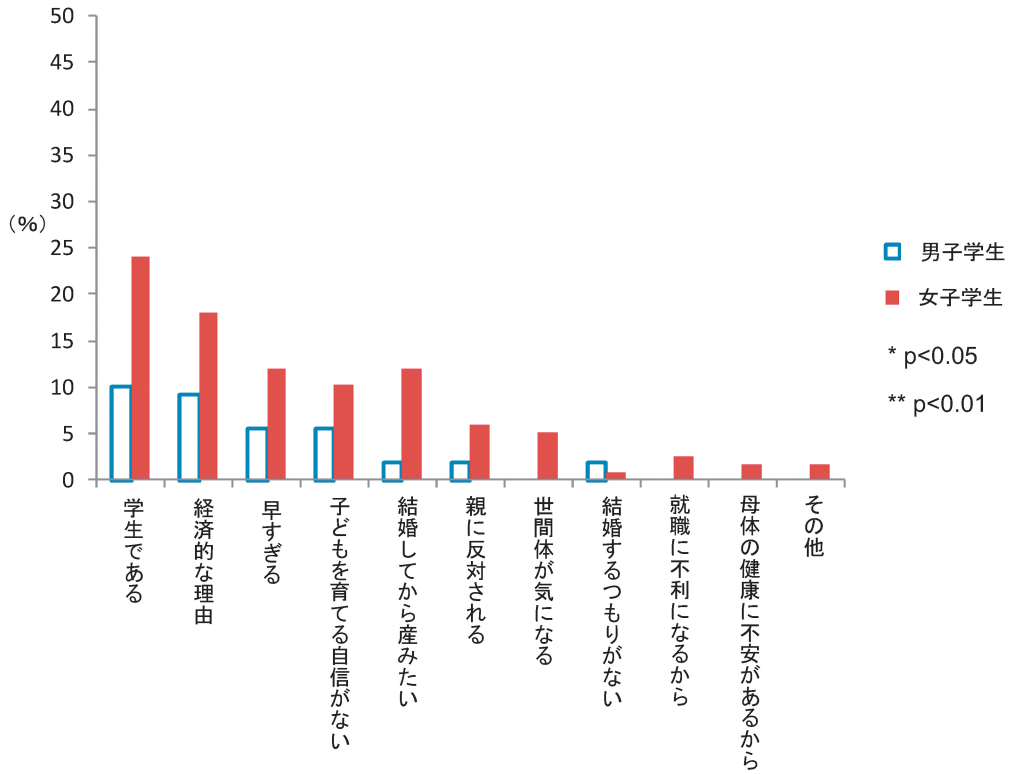


図14　中絶させる／中絶する理由（男女別）

現在、パートナーまたは自分が妊娠したらどうするかに対する回答を性交経験別にまとめ、比較を行った（図15）。無回答者数は経験あり群４名、経験なし群１名であった。

性交経験あり群で「産ませる／産む」という回答は23名（35.4％）、「中絶させる／中絶する」は７名（10.8％）、「わからない」は31名（47.7％）であった。経験なし群で「産ませる／産む」は12名（29.3％）、「中絶させる／中絶する」は５名（12.2％）、「わからない」は24名（58.5％）であった。２群間に有意な差は認められなかった。

斎藤ら[9]の研究では、性交経験なし群に「産ませる／産む」と回答した割合が有意に高く、本研究結果とは異なっていた。性交経験なし群に「産ませる／産む」の割合が高かった理由について斎藤ら[9]は、性交経験者は妊娠を自分自身の問題と考える立場であるの

に対し、性交未経験者は自分の考えや理想が優先されているためではないかと述べている。本研究では、「産ませる／産む」と「中絶させる／中絶する」という回答で、性交経験あり群となし群との間に有意差は認められなかった。「わからない」と回答した者は性交経験あり群では５割弱、経験なし群では６割弱みられた。岸田[10]の研究によると、中絶経験者４名のうち３名は「避妊をいつもする」と回答した。いつも避妊をしていたにもかかわらず、妊娠をしたという報告は北村ら[21]によってもされている。本研究の性交経験者の半数が「わからない」と回答しているが、妊娠する可能性をどう考え性交をしているのか、この点についてさらに追及していく必要性が考えられた。

「中絶させる／中絶する」と回答した性交経験者25名、性交未経験者16名を対象に、中絶する理由を聞いた。性交経験別の比較において、中絶する理由に有意な差は認められなかった（図16）。岸田[10]の研究同様、学生であることと経済的な理由により「中絶させる／

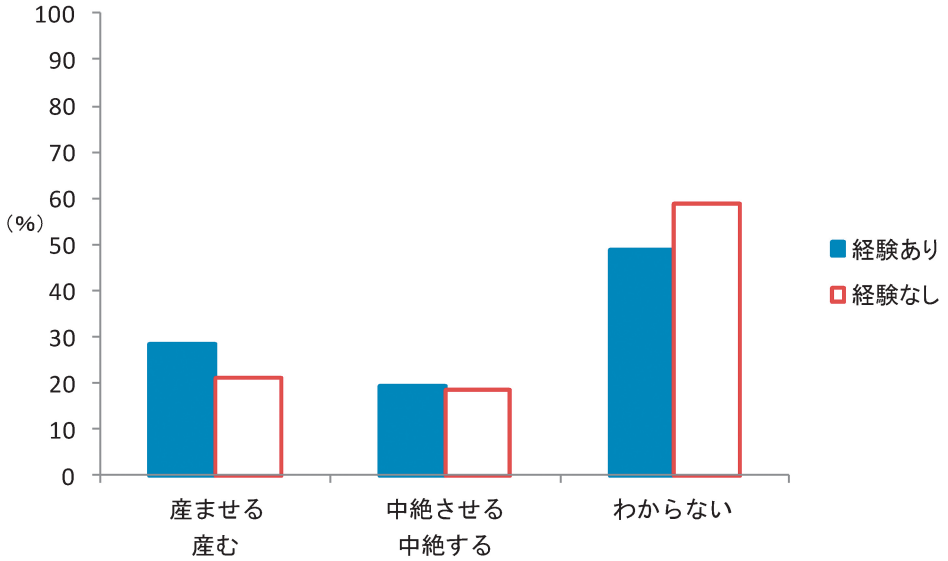


図15　パートナーまたは自分が妊娠したらどうするか（性交経験別）

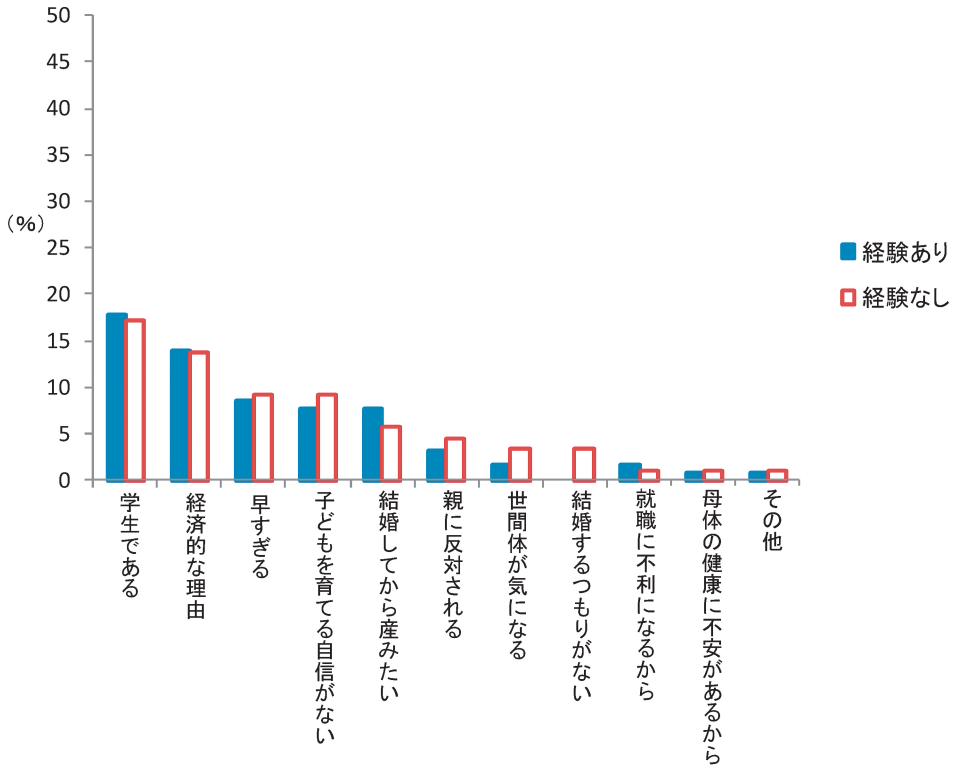


図16　中絶させる/中絶する理由（性交経験別）

中絶する」ことを選択せざるを得ない状況がみられた。

現在、パートナーまたは自分が妊娠したらどうするかに対する回答を男女別および性交経験別に分け、比較を行った（図17）。男女とも性交経験あり群、なし群に有意差はみられなかった。性交経験よりも男女の考えに差があることが図から読みとれた。

6）実際の避妊状況について

性交経験があると回答した129人に、実際の避妊状況を聞いた。結果をまとめる際、性別無回答の２名を除き、127名の回答を男女別にまとめ、比較検討を行った（表1）。「避妊を必ずする」と回答した者は全体で71.7％、男女別では男子学生75.4％、女子学生67.7％であった。なお、性別無回答の2名は「必ず避妊をする」と回答した。

第６回青少年の性行動全国調査[22] では「いつも避妊を実行している」と回答した大学生男子は61.7％、大学生女子は62.7％であった。「場合による」という回答は大学生男子で32.8％、大学生女子で33.9％であった。また、「いつもしていない」と回答した大学生男子は5.5％、大学生女子は3.4％であった。本研究結果は全国調査の結果よりも避妊実行率が高かった。

7）行っている避妊法

性交経験があると回答した129名に行っている避妊法を複数解答可で聞いた。男女別に結果をまとめる際に性別無回答の２名を除き、127名の回答をまとめた（図18）。この質問に対する無回答者数は男子学生16名、女子学生17名であった。

結果は男女ともに「男性用コンドーム」一番が多く、男子学生48名（73.8％）、女子学生45名（72.6％）であった。次に多かった回答は「膣外射精」で、男子学生5名（7.7％）、女子学生5名（8.1％）であった。「女性用コンドーム」と回答した１名以外はすべて「男性用コンドーム」と答えた。また、「男性用コンドーム」

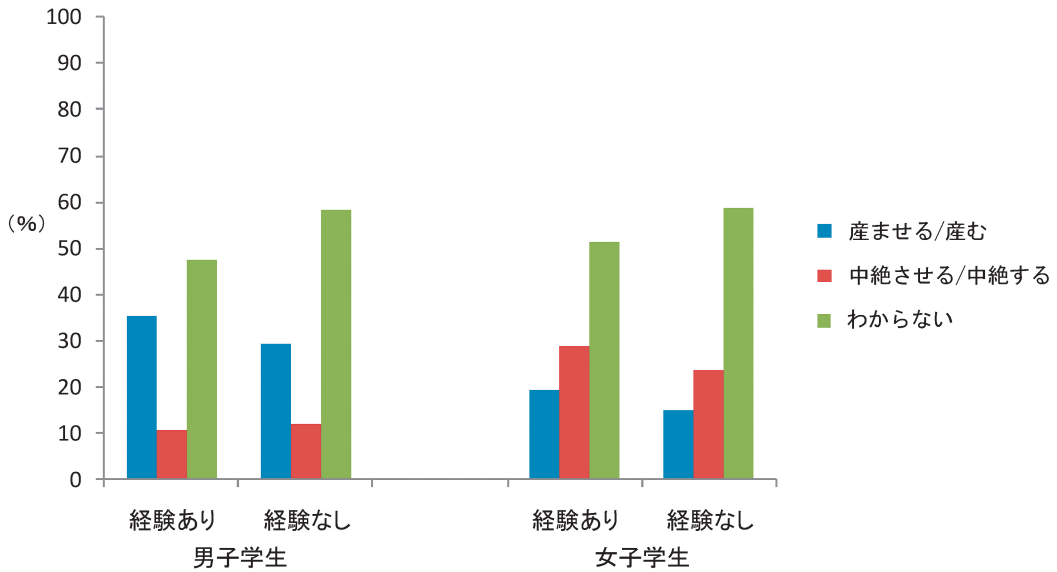


図17　パートナーまたは自分が妊娠したらどうするか（男女別および性交経験別）

表１　実際の避妊状況について（性交経験者を対象）

	男性（65名）		女性（62名）		全体（127名）	
	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）
必ずする	49	75.4	42	67.7	91	71.7
ほぼする	13	20.0	11	17.7	24	18.9
時々する	1	1.5	5	8.1	6	4.7
まれにする	2	3.1	2	3.2	4	3.1
しない	0	0	1	1.6	1	0.8
無回答	0	0	1	1.6	1	0.8

に加えて「膣外射精」、「基礎体温法」、「ピル」、または「殺精子剤」と回答した者が数名いた。男女間に有意差はみられなかった。

行っている避妊法は１名を除いた回答者すべてが、「男性用コンドーム」と回答し、男性側に頼る避妊法を行っていることが明らかになった。性行動全国調査結果[22] 同様、「避妊＝コンドームを使うこと」という状況は本研究結果からも明らかになった。

８）現在の避妊状況は十分なものであると思うか

「性交経験がある」と回答した129名に現在の避妊状況が十分なものであるか聞き、性別無回答の２名を除く結果を男女別にまとめた（図19）。「十分だと思う」は男子学生５名（7.7%）、女子学生7名（11.3%）、「ほぼ十分だと思う」は男子学生39名（60.0%）、女子学生36名（58.1%）、「あまり十分ではない」は男子学生14名（21.5%）、女子学生13名（21.0%）、「十分ではない」は男子学生５名（7.7%）、女子学生６名（9.7%）、無回答者が男子学生２名であった。男女間に有意差はみられなかった。

９）性交の際、避妊をしない理由

「性交経験のあり」と回答した129名に対して、実際の避妊状況を尋ねたところ、93名（72.1%）が「必ず避妊をする」と回答し、「ほぼする」は24名（18.6%）、「時々する」は6名（4.7%）、「まれにする」は４名（3.1%）、「しない」は１名（0.8%）、無回答１名（0.8%）であった。「必ず避妊をする」と回答した者以外の35名（男子学生14名、女子学生17名）を対象に、避妊しない理由を聞き、その結果を男女別にまとめた（図20）。男子学生２名、女子学生２名が無回答であった。

男女ともに高い割合だった理由は「避妊具を買い忘れた」（男子学生７名：50.0%、女子学生８名：47.1%）であった。男子学生で次に割合が高かった理由は「快感を損なう」（5名：35.7%）、「興奮して余裕がなかった」（３名：21.4%）、「装着が面倒」（３名：21.4%）と続いた。また、「妊娠の心配がない」を選択した男性が２名いた。

女子学生の必ず避妊をしない理由で「避妊具を買い忘れた」の次に割合が高かった理由は「使用を言い出せなかった」（６名：35.3%）、「相手が嫌がった」（４名：23.5%）、「避妊具の購入が恥ずかしい」（３名：17.6）と続いた。

男女間の比較では、「快感を損なう」（男子学生：35.7%、女子学生：5.9%）および「装着が面倒」（男子学生：21.4%、女子学生：0.0%）と回答した割合が男子学生に高く、女子学生との間に有意差が認められ

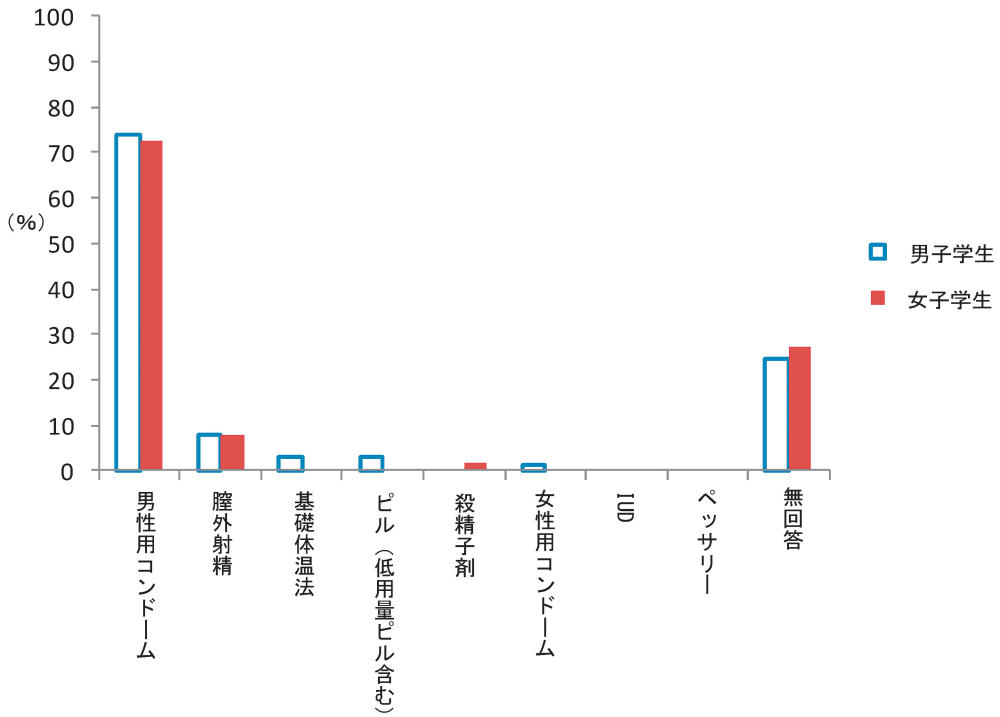


図18　行っている避妊法

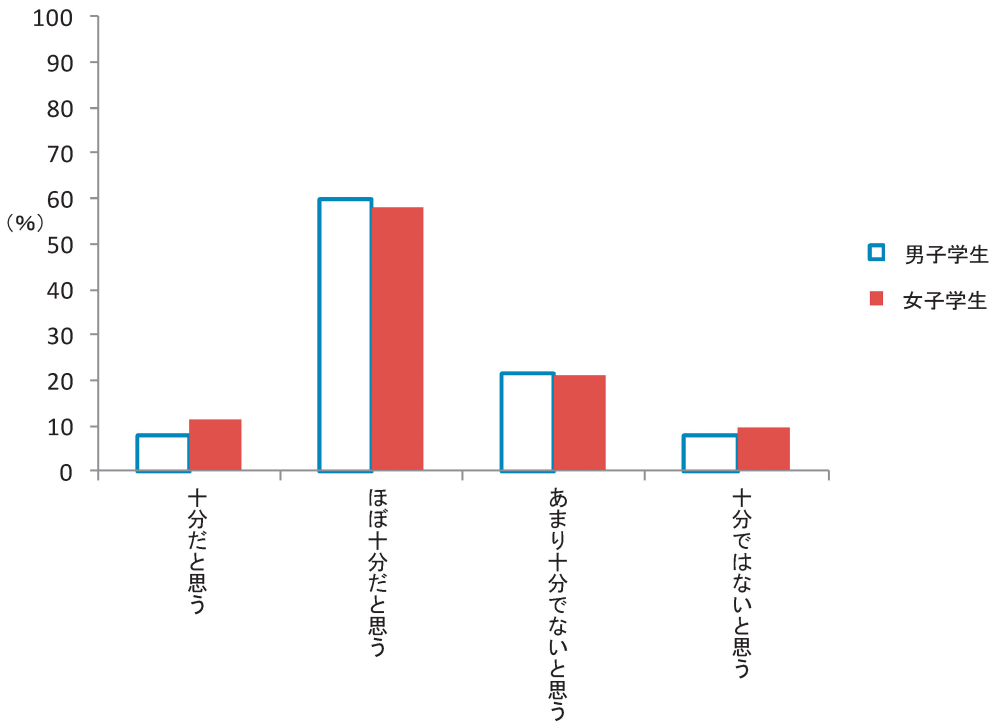


図19　現在の避妊状況は十分なものか

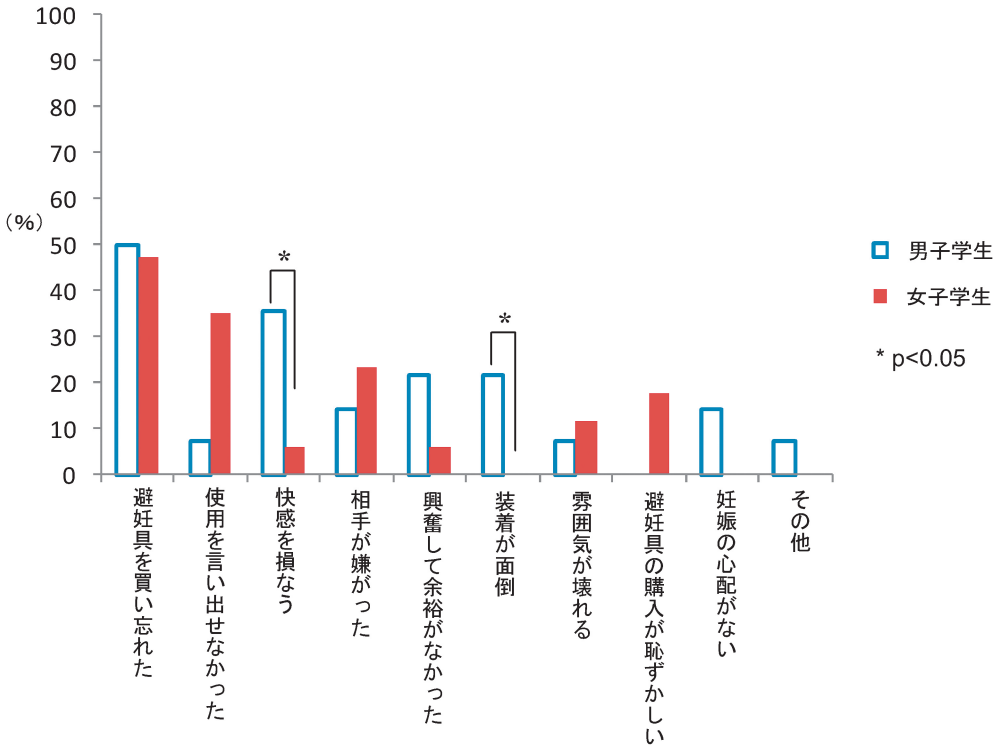


図20　性交の際、避妊をしない理由

た（$p<0.05$）。

避妊をしない理由について、性行動全国調査結果[22]によると、「準備していない」が男女ともに一番多く、大学生男子で31.4％、大学生女子で35.2％であった。次に「たぶん妊娠しない」が続き、大学生男子が30.0％、大学生女子が34.1％であった。斎藤ら[9]の研究では「避妊具を買い忘れた」が一番多く、本研究の結果と同様であった。「快感を損なう」という回答が男性で有意に高かった結果も斎藤ら[9]の研究と同様の結果であった。男子学生では、「快感を損なう」、「装

着が面倒」、「興奮して余裕がなかった」という回答の割合が高く、斎藤ら[9]が指摘するような自己中心的な行動が、また女子学生では、「使用を言い出せなかった」、「相手が嫌がった」、「雰囲気が壊れる」、「避妊具の購入が恥ずかしい」という回答が多く、積極的な避妊行動の欠如がみられた。

池上[23]は、青年期（18～25歳）の男女のコンドーム使用を阻害する要因は、男女で異なると述べている。その理由として、男女の性関係において、女性は従順な方がいいというジェンダーの影響があると指摘している。相手との関係を重視する女性は、自分からコンドームの使用を言い出すことができない。一方、青年期の男性のコンドーム使用を阻害する要因に「性の健康リスクについての楽観的な態度」、「使いこなし不安」、「コンドーム使用による流れの不安」が挙げられた。さらに男性の場合、妊娠への不安は女性よりは低く、その結果性の健康について楽観的になってしまうと考えられる。女性は性的に受動的であり、男性は能動的という関係は本研究結果からも浮かび上がっている。関係を重視するあまりに女性は保健行動をとることができず、男性は健康リスクの回避よりは快感や関係性を重視してしまう。島崎ら[24]は性行為を行う時に抱くと予想される感情を、男女異なる立場に立ち、学び合っていくことも健康教育の一環として必要ではないか。「選択と意思決定ができるようにすること」これこそが性教育における必要最小限の課題となるのではないだろうかと述べている。池上[25]も男子には自発的要因、女子には環境（関係）的要因という明瞭な違いがあり、ジェンダー固有のアプローチが不可欠になると述べている。

Ⅳ．まとめ

本研究ではＡ大学教育学部の大学生を対象に性に関する意識・行動等のアンケート調査を行い、将来、性教育を教える立場にある大学生の性の意識や性行動の実態を明らかにすることを試みた。

性交の行為をしてもよいと考える時期について、男女ともに性交経験あり群の半数以上が「高校生くらい」と回答した。女子学生は性交経験の有無による差がみられ、「成人後」や「結婚後」と回答した割合が経験なし群で有意に多かった。一通りの性教育を受けた大学生、そして今後性教育を行う立場に立つ教育学部生に対し、妊娠や感染症のリスクをどうとらえているのか明らかにすることは重要な課題である。

性交経験者は有効回答226名中、129名（57.1％）であった。そして性交経験者129名中「避妊を必ずする」と回答した者は93名（72.1％）であった。避妊法については96名が回答しており、「女性用コンドーム」と回答した１名を除く95名（73.6％）が「男性用コンドーム」と回答した。「膣外射精」は10名（7.8％）で２番目に多かった。避妊法については無回答者が多かったが、現在の避妊状況は十分かどうかに対する回答は、「十分だと思う」12名（9.3％）、「ほぼ十分だと思う」77名（59.7％）と、性交経験者の７割の学生が避妊状況は「ほぼ十分」または「十分だ」と考えていることが明らかになった。

性交の際「避妊を必ずする」と回答した者以外に、避妊をしない理由を尋ねたところ、先行研究同様の男女差がみられた。男性では、「快感を損なう」、「装着が面倒」、「興奮して余裕がなかった」という回答の割合が高く、斎藤ら[9]が指摘する自己中心的な行動がみられた。女性では「使用を言い出せなかった」、「相手が嫌がった」、「雰囲気が壊れる」、「避妊具の購入が恥ずかしい」という回答が多く、積極的な避妊行動の欠如がみられた。性行為を行う時に抱くと予想される感情を、男女異なる立場に立ち、学び合っていくことも健康教育の一環として必要ではないかとする島崎ら[17]の指摘が今後の性教育に必要な考え方であることがいえる。

また、第６回青少年の性行動全国調査報告[22]によると、初交時に避妊を実行したとする割合は、初交の年齢が高くなるほど上昇していることから、避妊の実行という点で考えると、低年齢層への性教育が必要であるとまとめている。また、初交の動機と避妊の実行率の関係をみると、相手の愛情や好意がある場合において、初交においても避妊への意識が高まっていることが明らかになった[22]。「遊び半分で」、「なんとなく」、「酒を飲んでいて」、「無理やり」などの動機では避妊実行率が低いことから、このような結果を重く受け止め、早期の適切な教育的介入の必要性が求められている。

現在パートナーまたは自分が妊娠したらどうするかに対して、本研究の性交経験者の半数が「わからない」

と回答している。このような結果から、過去に予期せぬ妊娠のリスクについて教わる機会がなく、また予期せぬ妊娠が自らに起こりうる問題として考える機会を与えられてきていないことが示唆される。

人工妊娠中絶後の精神的な影響については、さまざまな研究結果が報告されており、若者の予期しない妊娠そしてその結果としての人工妊娠中絶はこころのトラウマを作りかねない事態となっている[7)8)26)27)]。本研究の、教育学部生の約半数が高校生以前の性交を認めていた。予期しない妊娠により人工妊娠中絶を行うことで、どれほど精神的に追い詰められるかを想像できるだろうか。中絶の経験を前向きにとらえられる者もいる。しかし、心に傷を負い、立ち直れずに生き続ける者も少なくない。教育現場の早い段階で、児童・生徒を対象に、予期せぬ妊娠について、またその可能性について考えさせる性教育は健康教育を考えた上でも大切であると考えられる。

本来、妊娠、出産は喜ばれるべきものである。しかし、予期しない妊娠は、本人はもちろん、周囲の多くの人にも影響を与える。性交を行うにあたっては必ず妊娠の可能性を考えなければならない。望まない時期の妊娠・出産に伴って生じる問題点やそうならないための方法、そして幸せな妊娠・出産について考えさせる機会を子どもたちに与えていくことが、今後の性教育に必要だと考える。

参考文献

1）中央教育審議会　初等中等教育分科会　教育課程部会　健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会（第５回）議事要旨．参考２　文部科学省における性教育への取り組みについて．文部科学省ホームページ．http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/022/siryo/05071304/s002.htm.

2）中央教育審議会　初等中等教育分科会　教育課程部会　健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会.健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会　これまでの審議の状況 －すべての子どもたちが身に付けているべきミニマムとは？－．文部科学省ホームページ．http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05091401.htm.

3）厚生労働省：厚生労働統計一覧，母体保護統計報告，平成13年母体保護統計報告，2001，http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001046516.

4）厚生労働省：平成18年度保健・衛生行政業務報告（衛生行政報告例）結果の概要，母体保護関係，2006．http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/07/kekka5.html.

5）厚生労働省：平成20年度保健・衛生行政業務報告（衛生行政報告例）結果の概要，母体保護関係，2008．http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/08/dl/data_006.pdf.

6）黒島淳子，廣川真理子．望まない妊娠等を防止する～中絶を受けた女性の心理～．平成７年度厚生省心身障害研究，1995: 82-97.

7）第４回「男女の生活と意識に関する調査」結果の概要．家族と健康 2009，659．http://www.jfpa.or.jp/02-kikanshi1/659.html.

8）北村邦夫．日本人の性意識・性行動－中絶減少から読み解く－．母性衛生，2009; 50（1）: 20-26.

9）斎藤和佳子，中野朋美，芝木美沙子，笹嶋由美．大学生の性意識と性行動の実態調査．北海道教育大学紀要（教育科学編），2006; 56（2）: 47-61.

10）岸田泰子．若年者の人工妊娠中絶前後に必要とされる援助に関する研究．思春期学，2002; 20（2）:266-272.

11）群馬県教育委員会スポーツ健康課：性および性教育に関する意識調査，2006.

12）今野洋子．大学生の避妊に対する意識・行動に関する報告―Ａ大学の学生を対象とした調査報告―．人間福祉研究，2003; 6: 101－116.

13）小学校学習指導要領解説　体育編．文部省，平成元年３月.

14）新版　学校保健ハンドブック　教員養成系大学保健協議会編．ぎょうせい．平成４年.

15）中学校学習指導要領　保健体育編　体育編．文部省，平成元年３月.

16）学校保健ハンドブック＜第４次改訂＞　教員養成系大学保健協議会編．ぎょうせい．2004年.

17）中学校学習指導要領　保健体育編　体育編．文部省，平成10年12月.

18）高等学校学習指導要領　保健体育編　体育編．文部省，平成11年3月.

19）高等学校学習指導要領解説　保健体育編　体育編．文部省，平成11年12月.

20）原純輔．「青少年の性行動全国調査」とその30年．「若者の性」白書－第６回　青少年の性行動全国調査報告－，2007; 7-21.

21）北村邦夫，片桐清一，真井康博，長池文康，家坂清子，岩倉弘毅，高橋健太郎，平嶋仁博，柿木成也，町浦美智子．十代の望まない妊娠防止対策に関する研究 II.わが国十代の妊娠、避妊、出産に関する現状調査．平成７年度厚生省心身障害研究報告書，1995a: 160-179.

22）永田夏来．性行動の変化と避妊の実行状況．「若者の性」白書－第６回　青少年の性行動全国調査報告－，2007; 101-

119.
23）池上千寿子．男と女のコミュニケーション．母性衛生，2009;50（1）:27-31.
24）島崎継雄．性教育の現状と課題．臨婦産 2009;63（2）:126-129.
25）池上千寿子．エイズ教育推進のための新たな“しかけ”．現代性教育研究月報 2001;19（11）:6-9.
26）杵淵恵美子．バランスシートとうつ尺度からみた人工妊娠中絶を受ける女性のアンビバレンス．日本女性心身医学会雑誌,2008;13（3）,115-126.
27）鈴井江三子，柳修平，三宅馨．人工妊娠中絶を経験した女性の不安の経時的変化－術前、術後、3か月後、6か月後－．母性衛生,2001;42（2）:394-400.

（たかはし　たまみ・きたうら　ゆうき・あらい　よしひろ）